

令和7年度 学校自己評価書

鈴鹿市立白子小学校		NO.		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用	1 授業改善 ・全教員による授業公開100%(指導主事を招聘年4回) ・「めあて」「まとめ」「振り返り」を位置付けた授業スタイルの確立 ・児童の興味・関心・意欲を大切にして、考えを深め、表現し、適切に評価する授業の実施 ・学びに向かえる掲示物の工夫、教室環境の整備、学習規律の確立:学年単位、または学校単位 ・学力調査(学期末テスト)・みえスタディ・チェック:全国平均・県平均以上 ・児童アンケート「授業はわかりやすいですか」:90%以上	○研究授業を行う職員100% ○全国学調(6年)は、国語・算数・理科は全国県平均以上、みえSC(5年)は、国算は県平均以上、5年理科は県平均をわずかに下回る。 ●児童アンケート「授業はわかりやすいですか」肯定的回答(低学年93.8%・高学年86.1%)若干高学年は下回った。 ○「めあて」「まとめ」「振り返り」を位置付けた授業スタイルを全体研修会で確認し、統一した指導をすることができた。また、「めあて」「まとめ」「振り返り」をノートにどのように書かせていくかも共通した指導ができるように、研修会で確認をすることができた。 ○話し方・聴き方・嬉しい反応・話し方の例について統一した物を作成し、掲示することができた。 ●掲示物、授業規律の統一が学校全体でできるように、研修会を行ったが、若干の違いがある。	・校内研修で決めた掲示物・授業規律については、4月当初に全体研修会を開き、統一をはかっていく。また、よりよいものにしていくために、教員同士で、適宜見直しやよりよいものを共有する機会をもつ。 ・わかりやすい授業を目指すため、日々、教材研究を大切にするとともに、教員同士の授業参観や研修会等を行い教員の指導力の向上を目指す。 ・全体研修で本校の児童の学習における弱み・強みを分析し、指導にいかせるようにする。	・掲示物や授業規律の統一は、どのくらいの違いがあるのか不明だが、クラスや担任の先生の個性が出ているのであれば、無理に統一する必要はないと思う。 ・高学年は学習が難しくなるので、引き続きわかりやすい授業になるように努力、工夫をお願いしたい。中学校以降の学習意欲にもかかわってくる。
	2 基礎学力の向上 ・少人数指導(習熟度・T)によるきめ細かな指導。・算数科少人数指導実施学年(4年生)の算数単元テスト:全国平均以上 ・「よむYOMUワークシート」「読む・書くワークシート」を活用した読解力、論理的思考力の育成。朝学習を利用し、週1回実施。	●4年の単元テストは75%の達成率で、全国平均を下回っている。 ○「よむYOMUワークシート」「読む・書くワークシート」の取り組みは、学年によって取り組み方にばらつきはあったが、全校で取り組むことができた。	・「よむYOMUワークシート」「読む・書くワークシート」の取り組みは、継続して行っていく。定期的かつ効果的に行えるよう、年度始めから全体で取り組み方を確認して行う。	・学力向上には、その年度だけではなく、継続的な取り組みにより、成果も向上すると思われる。次年度も今年度の課題を洗い出し、新たな取り組みを検討していただきたい。 ・児童を持つ親から見ると、宿題以外は正直なところあまり勉強していない。もう少しノーメディアディの取り組みを増やしていただくと、少しは学力向上につながる可能性がある。
	3 家庭学習の習慣化 ・家庭学習の手引きを作成し、学年×10+10分程度を目標にした家庭学習時間の確保。 ・児童アンケート「宿題をきちんとしていますか」:90%以上 ・保護者アンケート「お子さんは家庭学習の習慣がついていますか」:80%以上	○児童アンケート「宿題をきちんとしていますか」:(低学年そう思う71.2%、どちらかというと思う21.2% 高学年そう思う68.8%、どちらかというと思う25.8%) ●保護者アンケート「お子さんは家庭学習(学年×10+10分程度)の習慣がついていますか」:(そう思う27.5%、どちらかというと思う39.9%)	・4月に学習の手引きを配布する際に、自主学習の進め方について指導を行う。また、テスト前などには声掛けをして、自主学習を促していく。	
	4 ICT機器を活用した授業の推進 ・教職員のICT全体研修会:年1回以上実施 ・ICTサポーターとの連携授業:毎学期1回以上 ・クロムブック活用アンケート「授業中にクロムブックをどの程度使っていますか」.:週3回以上、80%以上(4年生以上) ・長期休暇の持ち帰り:100% ・日常的な持ち帰り:4年生以上(毎日)、3年生以下週1回以上	○ミニ研修会3回実施(見込み含む)。希望者のみに絞って研修し理解を深めた。全体研修会1回実施。各学年の児童の実態に合わせて、ベネッセアプリのミライシード新機能についての研修を行った。 ○職員の大半がICT機器の活用に抵抗がなくなった。必要な研修については適宜ミニ研修を行うことで対応する。 ○非認知能力及び読解力向上アンケート(教委実施)「授業中にクロムブックをどれくらい使っていますか」に、低学年は28%、高学年は70%がほぼ毎日、週に3回以上と回答。 ○日常的な持ち帰り:3、4、5、6年生は毎日持ち帰り、2年生は週1回以上持ち帰った。引き続き低学年から端末活用能力の向上を目指す。	・校内研修会を随時実施し、指導者のスキルの向上を推進する。 ・ベネッセ派遣のICT支援員を活用し、指導者のスキル向上を推進する。 ・デジタルとアナログを使い分けて、教科指導を行う。辞書引きは、1年生から授業で活用しており、今後も進めていく。 ・低学年の端末持ち帰りを推進する。活用方法等、低学年でもできる内容を還流する。	・クロムブック活用で、将来的にタイピングやICTの理解に繋がっていて良い。 ・先生方も上手に教えており、児童も驚くほど使いこなせている。 ・ICTも大切だが、アナログな活動も大切ではないか。例えば、辞書引きが大切である。PCでは瞬時に答えにたどり着くが、辞書を引いて、関連語句を見たり、その他の言葉にも触れることは大切であると思う。
長期欠席対策	全ての児童の居場所がある学校づくり ・やりぬく力、自制心、自己肯定感、社会性を身に付ける教育活動の推進 ・いじめアンケートによる児童の実態把握と早期対応 ・SC、SSW、SLS、ほっとルームの活用及び関係機関との連携 ・不登校対策委員会の実施:毎週定期的に実施 ・代表委員会による挨拶運動:月1回 ・集会活動:学期1回以上(生指部と連携) ・児童アンケート「学校に来るのは楽しいですか」:90%以上 ・不登校(傾向)児童の児童生徒理解・支援シート作成:100% ・長期欠席(30日以上)児童数:R6年度以下	●児童アンケート「学校に来るのは楽しいですか」:86.7% ○不登校傾向(ほっとルーム利用含む)児童について、児童生徒理解・支援シートを100%作成できた。 ○不登校傾向にある児童について、特別支援コーディネーターが中心となり、担任、ほっとルーム職員、SLS、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと連携して、支援を行うことができた。毎週水曜日5限目に委員会を実施した。 ○ほっとルームが開設され、不登校傾向にある児童を中心に、安心して過ごせる居場所づくりをすすめた。「ほっとルームがあるから登校できている」という声は、児童や保護者からも出てきている。 ○長期欠席(30日以上)児童数の減少。(R5年度末23人、R6年度末14人 R7年度11月時点で10人)	・不登校傾向(ほっとルーム利用含む)児童の状況は様々であるが、今後も長期欠席児童数が少しでも減少していくよう、チームで対応していく。	・長期欠席者の減少や居場所の周知など、活動の成果が表れています。今後は、関係機関やSC、SSWの方々との連絡を深めてほしい。 ・全児童の登校は難しいと思うが、減少しているとのことで、現状の活動を引き続きお願いしたい。 ・長欠児童が年々、減少しているのは、先生や保護者の努力の成果だと思う。
非認知能力育成	人権尊重、非認知能力育成を基盤に据えた授業実践及び教育活動の実施 ・児童の興味・関心・意欲を大切にして、考えを深め、表現し、適切に評価する授業及び教育活動の実施 ・児童アンケート「自分には良いところがあると思いますか」:90%以上 ・児童アンケート「先生は、あなたの話をよく聞いてくれますか」:90%以上 ・非認知能力数値が前年度より向上	○非認知能力アンケート 「やりぬく力」前年比0.1P増、「自己肯定感」0.1P増、「社会性」「自制心」は前年比と同じ。 ●人権アンケート「自分にはいいところがあると思いますか」:84%(3.4%増) 数値的には少し上がってきたが、他者比較により自己肯定感が上がらない児童もみられる。 ○児童アンケート「先生は、あなたの話をよく聞いてくれますか」:92.5% 引き続き児童たちの声にしっかり耳を傾け、対話を通して、非認知能力の育成に取り組む。	・6年間の学びを見通して人権カリキュラムを作成し、自他の人権を尊重しようとする意識・自他の人権を守るための実践的行動力を全教科・全領域に位置づけ授業実践していく。 ・児童との対話をしっかり行い、頑張りや成長を認め、褒めることを通して、適切に評価していく。	・先生方、お忙しいと思いますが、これからもよろしく願いしたい。
地域連携	1 地域に「開かれた学校」の推進 ・地域人材・地域教材を活用した教育活動の推進 ・地域ボランティアの活用 ・地域・家庭と連携した防災、防犯、交通安全の取組の実施 ・スポーツ出前授業等外部人材を活用した出前授業を各学年1回以上 ・ボランティアによる学習支援や見守り支援等:年200回以上 ・津波避難訓練、引き渡し訓練実施:年1回	○芸術鑑賞やスポーツ出前授業等、各学年の実態に合わせ出前授業を活用することができた。 ○学習ボランティア(週4日)、登下校の見守り支援や避難訓練への支援、読み聞かせや図書館整備で200回以上支援いただいている。 ○津波避難訓練、引渡し訓練を5/17に実施。地域ボランティアや警察とも連携して行った。 ○交通安全教室を4年生で11月6日に実施した。	・児童支援隊、学習環境図書ボランティア等の支援を継続していくことが地域とともに児童たちを育てることだと捉えている。今年度も児童集会で行った感謝の場を設けることを来年度も続ける。 ・観劇から校区にある白子高校の吹奏楽訪問演奏に変えたことは効果的であったため、このつながりを大切にする。 ・食育は、各学年で栄養教諭を中心に行われている。給食時の放送で、メニューについての情報発信もしている。食についての関心が高まるよう努めているため継続して行う。	・給食についてなど、人気メニューや調理の仕方などを発信することで、家庭での会話も広がるのではないかと。 ・調理実習後、家で家族に作ってあげると良いと思う。
	2 教育活動の公開・情報発信 ・学校行事と授業の公開:学期1回実施 ・学校通信、学級通信による情報発信:学年、学校だより:年12号以上作成 ・ホームページ更新:毎日更新 ・保護者アンケート「学校通信やHP等で学校の情報を伝えていますか」:90%以上	○授業公開を学期に1回実施した。 ○学年だよりを毎月発行し、ホームページは毎日学校の様子を紹介した。 ○保護者アンケート「学校通信やHP等で知りたいことが伝わっていますか」:91.9%と肯定的評価が高い。今後もHP等で学校の情報を積極的に発信し、保護者からの信頼を高めていく必要がある。	・継続的に学校の様子を発信していく。	・PTA除草作業も外部委託になり、地域の方とのふれあいが少なくなっているかと思う。半日程度のイベントもあればよいと思う。 ・アンケートの聞き方「友達に・・・」だと、「友達」に限定されてしまう。友達だけではなく、クラスや学年の子に対してはどのようなかを聞くべき方がよい。
	1 全教職員による学校運営への参画 ・人事評価制度を活用した管理職との面談:3回以上 ・二部会、企画委員会の活性化:月1回以上実施 ・教職員間の対話を重視した風通しのよい職場づくり ・校務DXを進め、教育の質を向上させ、効率化する。	○人事評価制度を活用した面談を、1月末で2回実施予定 ○毎月企画委員会を開き、教務部長・二部会部長との意見交換を行うことができた。 ○学期1回、コンプライアンス研修を行い、教員一人ひとりが、服務規律の確保を意識することができている。	・コンプライアンスの研修を重ね、意風通しの良い職場づくりを全職員が意識できるようにする。 ・情報共有シート、C4thの掲示板を積極的に活用し、報連相を行う。 ・二部会部長、教務担当の企画委員会を中心とした効率的・効果的な学校運営の組織づくりを推進する。	・絵や作文、得意なことを伸ばしてあげられていると思うが、たくさんの応募の取組は先生の負担になっていないか。 ・時間外削減は、今後とも努力をしてほしい。 ・業務内容が多く、時間のやりくりが大変だと思うが、先生個人では難しい部分もあると思う。学校全体で残業時間を減らす工夫をしていただきたい。 ・一部の先生に仕事が偏っていないか。
学校における働き方改革	2 時間外労働の削減 ・教職員間の交換授業、教科担任制を推進 ・職員会議提案資料の事前確認と提案の簡潔化 ・クロムブック校内掲示板とホワイトボード連絡黒板の活用と共通取組の遵守 ・定時退校日の設定と出勤システムによる勤務時間の確認	○12月末までの一人当たりの平均労働時間は24.6時間で、昨年より2.0時間削減できている。 ●月45時間以上の延べ人数は45人で昨年度比で17人増加。 ●放課後開催の60分以内の会議66% ○定時退校日月2回実施し、ほとんどの職員が月2回定時退校をすることができている。	・校務DXを進め、またスクールサポートスタッフの利用や教材の共有化を行い、教材研究等にかかる時間確保を工夫する。 ・支援は、支援員、介助員、サポートに入る教員と連携し、チームで児童を支援を行っていく。	

令和7年度 学校自己評価書

鈴鹿市立白子小学校		NO.		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
特別支援教育	1 個に応じた支援の充実 ・特別支援委員会の実施:毎週定期的に実施 ・特別支援教育コーディネーターを中心とした組織的な対応に努め、支援会議、ケース会議の実施:必要に応じて実施 ・個別の支援計画・指導計画の充実:前期後期2回更新 ・国際学級設置による取り出し:週9時間以上 ・JSLバンドスケールを用い、児童の日本語能力を把握して共有 ・学年だより等の翻訳文書を発行 ・通級指導教室の効果的な活用	○支援会議とケース会議を必要に応じて実施することができた。 ○個別の支援計画を年度初めに更新し、個別の指導計画を1学期と2・3学期の2回作成することができた。 ○国際教室の授業を週20時間実施することができた。 ○県や市の通訳を利用し、翻訳文書の発行に努めた。 ○通級指導教室に32人の児童が入室し、児童の実態・課題に合う内容で授業をすることができた。	・今後も、支援が必要な児童の支援会議やケース会議をもち、対応について協議していく。 ・今後も、外国籍児童巡回相談(支援)員や関係機関と連携しながら、外国籍児童の支援充実を図っていく。	・多様化する課題に対応できるように、さらなる個々のスキルアップに努めていただきたい。
	2 特別支援教育の視点にたった教育活動の充実 ・集中できる落ち着いた学習環境づくり ・見通しを持たせる授業の実施 ・ユニバーサルデザインの授業づくり研修会:年1回以上	○特別支援の視点を入れて、とびうお学級の研究授業を実施した。	・特別支援教育の研究授業や研修を通して、教職員の特別支援教育の知識を深め、授業に取り入れていく。 ・とびうお教室、スマイル教室、国際教室に在籍する支援が必要な児童の理解を深める授業を実施する。	
生徒指導	1 落ち着いた生活態度 ・重点目標(挨拶・返事、廊下・階段歩行、チャイムを守る、トイレの使い方、校内の整頓、無言清掃)の徹底 ・学びに向かえる学習環境、学習規律の確立 ・児童アンケート「進んであいさつをしていますか」:90%以上 ・児童アンケート「学校の約束や決まりを守ることができましたか」:90%以上 ・児童アンケート「友達にやさしくできましたか」:90%以上	●児童アンケート「進んであいさつをしていますか」 85.8%(+4.5P)(児)79.5%(△9.6P)(保護者) ●児童アンケートでは、きまりを守っている意識が高いが、持ち物や廊下歩行など教師と児童の認識に開きがある。 ○児童アンケート「学校の約束やきまりをまもることができましたか」:90.6% ○生活安全委員会より、あいさつ運動を継続的に行い、進んであいさつすることの大切さを訴えることができた。	・学校では、地域の方を含め、生活場面でのあいさつの大切さを指導している。校内だけでなく、地域でのあいさつが広がることを期待したい。そのためにも、児童には継続的に挨拶の指導を実施する。 ・校内での挨拶、廊下歩きにまだ課題がある。きまりがなぜあるのかを伝え、それらのきまりを守る指導を徹底したい。全職員で指導する。	・学校外では、なかなか「こんにちは」が返ってこないことが多い。時代なのだろうが、少し残念である。 ・「あいさつ」は大人になっても重要な事なので、学校でも教えてほしいです。
	2 対話を重視し、児童の良さや可能性を認め、共感しながら接する組織的な指導 ・各教職員が、常に自身の取組を振り返り、児童により好影響を与える関わりを行えるよう改善 ・児童の状況や教職員の関わりについての振り返り:毎月の生活部会で確認	●保護者アンケート「白子小学校は、お子さんのことを気軽に相談できる学校ですか」:83.2%(+1.3P) ○学期ごとにいじめアンケートを実施し、問題を早期に発見し、対応に努めた。 ○生活安全委員会発足により、週2回あいさつ運動を実施した。 ○代表委員会が学期ごとに児童集会を開き、異学年交流を行った。	・いじめアンケートの実施については、アンケート実施後に細やかな聞き取りがされ、判定会議も行われている。その後の経過も観察がされている。継続的な児童観察、児童の情報共有を徹底する。	・このご時世、学校外で児童達から挨拶することははむずかしい。大人から積極的に声をかけることが大切である。 ・きまりを守る意識の差異をうめるべく、先生と児童との話し合いをしてはどうか。 ・校外で児童たちに注意をすることがあるが、素直に直すので、健全だと思う。
	3 問題行動の未然防止 ・いじめアンケート:年3回実施 ・保護者アンケート「白子小学校は、お子さんのことを気軽に相談できる学校ですか」:85%以上 ・学校内での児童の情報共有:週1回以上実施 ・電話、家庭訪問、懇談会、PTAとの話し合い等による保護者との連携			